

沙門はくいのCL 閑話 44
趙州勘婆
一身軽になって五台山登り一

遠藤博因

hakuin@river.ocn.ne.jp (富山県南砺市井波CLインストラクター)

新年明けましておめでとうございます。今年は辰年にあやかって世の中全体が上昇し活気あふれる年になればと願っています。今回もまた禅の逸話から始めたいと思います。

一人の僧が老婆に問うた

「五台山へはどの道を行ったらよいのでしょうか」

「まっすぐにお行き」と老婆は言った

僧が二、三歩行くと、彼女は

「立派なお坊さんなのに、またしてもこの程度か」と言い去った

その後ある僧が趙州にこのことを語ると、

「私が行ってその老婆の正体を見届けてやろう」と言った

翌日趙州は老婆のところへ行き、同じ質問をした。老婆もまた彼に同じ答えを返した。

帰って来た趙州は僧たちに向かって、

「私はお前たちのために、五台山の老婆の心底を見破った」と告げた

禅の逸話にはたびたび老婆が登場します。たいがいこのようなひと癖もふた癖もありそんな地悪婆さんのような役柄です。五台山は中国山西省の東北にある霊場として有名な山であります。古来数多くの名僧が住し修行したばかりでなく、一般参詣人も多い名山だそうです。日本ではかなり観光地化されていますが、比叡山や高野山等をイメージしていただければよいのではないのでしょうか。この老婆はおそらく五台山の登り口辺りで茶店でも開いていたのでしょう。修行僧から道を尋ねられると決まってこのようなやり取りが交わされ、こき落していたようです。

そこで趙州禅師はこの話を耳に入れるやいなや、その老婆のところへ出向き同じような問答を交わしてきます。しかし自分の僧堂へ戻るや弟子たちを集め、あの婆さんの心を見破ってきたぞと自信あり気に報告しました。一体どのように見破ったのかは逸話に一切書かれていません。


今までも紹介させていただいたように、禅の逸話では同じことをしているのに、それぞれに違う結果という話が多々あります。(例えばCL閑話 [11](#)・[19](#)) そしてその過程や理由については一切書かれていません。一体何故なのでしょう。禅は既成の概念を一度ぶち壊し、そこから真の眼で自己と対峙し、悟りの体験を目指します。五台山へ登るにはどのような道を選ぶとか、趙州禅師がどのようにして老婆の心を見破ったのかという方法論や理由づけは一切必要ないのです。五台山への道を他人に聞いたり、趙州禅師の看破の術を知ったりしたとしても、それは借り物であり、悟りの真眼を開くにはかえって邪魔になってしまいます。五台山へ登るということは、悟りを目指すという修行の道のりそのものなのです。老婆に何と言われようとも、高僧が何をしようと惑わされず自分自身の道を歩まなければいけないのです。

CLでも同じようなことを教えてくれています。山へ登る前に、嵐に遭ったらどうしよう、道に迷ったらどうしようと未来に対する不安にとらわれていてもいけません。未来の事象は誰も確実に予見できません。情報収集をして、計画を立てて必要なものを揃えるという行動を自ら実行しなくてはなりません。そのような必要な行動は不安な気持ちをやわらげてくれたりします。また山の頂上を目指すという目標を立てることで、一步一步の歩みを後押ししてくれます。CLでは困難に立ち向かうために自分自身に言い聞かせたり、心を高ぶらせたりする必要はありません。単純に目的に向かって必要な行動に着手して行けばよいのです。不確実なものや感情にとらわれず自らの行動中心というところは禅の修行と似ているところがあります。

最近不要な物を捨ててシンプルに生きる術が提唱されています。私たちは身の回りを調べるといかに物に依存していたり執着していたりするのが思い知らされます。捨てる、とらわれないという生き方は、禅やCLの教えにも呼応するところがあると思います。今年は物質的生活や心のダイエットを実行し身軽になって上昇してゆきたいものです。

今回も誌面にて皆さんとお会いできるご縁に感謝して

合掌

 [目次へ戻る](#)